



若者

Breaking Away

福住俊一*

“Breaking Away”という映画が数年前に日本でも上映されたのを御存じでしょうか。この映画はアメリカで空前の大ヒットとなった作品で、アカデミー賞にも数多くの部門にノミネートされたものです（実際にとったのは確か一部門だけだったようです）。映画好きでもない私が日本でもあまり知られていない映画の話をしたすのには訳があります。私は1978-1981の3年間アメリカはインディアナ州のブルーミントンという小さな町に住んでいました。ブルーミントンは人口約3万、そのほとんどがインディアナ大学の学生という典型的な大学町です。私が留学後まもなくキャンパスに映画のロケ隊が大挙して現われたのです。映画のロケ隊などというものは日本でも見たことがなかったのでつい好奇心にかられてエキストラでも出たいものだと思い回りをうろついたのですが残念ながらお呼びはつきにかかりませんでした。いったい大学の中でどんな映画をとるのだろうと思っていたのですが、それは田舎町のこと町の新聞にその映画のことが大々的に報道されました。インディアナ大学では毎年“インディ500”（インディアナポリスで行なわれる世界最大の自動車レース）をまねて“リトル500”という自転車レースが行なわれるのですが、そのリトル500にまつわることが映画化されたのです。大学町に住みながら大学に行けなかった町の青年が日々を無為に過ごすうち自転車競争に打ち込み遂にはリトル500で優勝するという、まあたわいのないお話です。小さな大学町でこんなお話を映画にしようとはまあ何とアメリカ人とは物好きな人種だ、一体採算はとれるのだろうかといらぬ心配までしたのですが、ロケ隊が去るとこの映

画のこともすっかり忘れてしまっていました。一年程たって私の研究も何とか軌道に乗りにかかったころ、“Breaking Away”が全米大ヒットとなっていることを知ったときにはとても信じられない気がしたものです。その映画がブルーミントンの町の映画館で上映されるころには町でも大変な騒ぎで、おらが町の映画が全米大ヒットになったと、いつもは閑散とした映画館もこのときばかりは超満員。私も研究室の同僚と早速見に行きました。毎日見慣れた風景が映画では見違える程鮮やかで、場面ごとに“あっ、この店は私がいつもピザを食べる店だ”などと思って喜んで見ている間に映画は終わってしまいました。見終ってみてもストーリー自体は先のたわいのないもので、誰もスターが出ている訳でもなし、一体何故この映画が全米で大ヒットしたのか不思議でなりません。よく考えてみるとその秘密は私が住んでいた町そのものにあるようです。とうもろこし畑の中にまるで陸の孤島のようにぼつんとある町。50年代の古き良きアメリカにタイムマシンで戻ったような、ベトナムも都会の荒廃も知らないアメリカングラフィティの世界。そんな豊かさと平和の中で自分達の目標を定め切れずに毎日を無為に過ごす青年たち、そんな若者のひとりがひとつの事に打ち込み人生を走り出す爽快さ、不確実性の時代と言われる現代で、純粹かつ単純な breaking away への郷愁が古き良きアメリカへのノスタルジアと重なって感動を呼び起こしたのかもしれない。

残念ながらこの映画の日本公開は惨々な結果に終わったようです（私の思い違いで公開もされなかったのかもしれない）。先進国中治安が一番、戦争もないという国ではアメリカの郷愁とは無縁なのかもしれません。あるいは日本では若者は受験に追い立てられる毎日で、目標

*福住俊一 (Shunichi FUKUZUMI), 大阪大学, 工学部, 応用化学科, 田中研究室, 助手, 工学博士, 物理化学

を捜すというより小さい時から既に目標を定められて走らされていて今更走り出す爽快さなどといってもピンとこないのでしょうか。いやそうではないように思います。いざ大学へは行ってしまおうと目標を失なってしまう、早々に五月病にかかるケースが多いと聞きます。私の経験でも大学入学の当初は、自分がいったい何をやりたいのかよくわからず、“Breaking Away”の青年達のように生半可な毎日を送っていたように思います。一般的に人生の breaking away あるいは taking off は実際に自分が自分の手で何かをやり始めた時、たとえば工学部では研究室に入ったときに始まるような気がします。私自身の場合はまったくそろそろと走り始めたためよく気がつかなかったのですが、2年前から大阪大学工学部にきて、今度は自分が若者の breaking away に立ち合うようになるとよくわかります。アメリカの“Breaking Away”が日本でヒットしなかったのは単にその映画の本質があまりにアメリカ的なものに包まれてしまっていたためのような気がします。アメリカの大学のキャンパスでなく日本の大学のキャンパスで本質的に同じ種類の映画を作るとひょっとして大ヒットするのではないのでしょうか。

考えてみるとこれまでの日本映画で大学の工学部のキャンパスで映画が作られたものがあったのでしょうか。大学のキャンパスを舞台とした映画というと典型的な青春映画で、大学のキャンパスは青春のはつらつきの象徴にしかすぎないか、あるいは“白い巨塔”に代表されるような権威の象徴でしかなかったような気がします。これではまるで大学は単なる子供の遊び場かあるいは何やら得体のしれない恐ろしい先生方が徘徊する化物屋敷です。いささか偏見を混じえて言えば、理工学部のキャンパスにこそ真の青春映画の題材に満ち溢れているのではないのでしょうか。社会の矛盾やら科学技術の反人間性とやらのクワイ話はもう程々にして、もう一度思い切り楽天的に科学技術の未来を信じて人生の breaking away をはかる若人の姿を描いてみてはどうでしょう。科学技術を即善だと信じる危険性はもう随分前から言いつくされてし

まっています、それはそれで確かに正しいのですがやはり一面にしかすぎません。科学技術の未来を信じて走り出そうとする若人あるいは走り続けている人々また過去に走り切った人々なしには未来もないし過去もなかったということが最も重要なしかも厳然たる事実であることをもういい加減認めてもよいでしょう。最先端科学技術の一般向けの紹介は最近マスコミでもよく見受けられますが、そこでは何故かそれを支える人間が抹殺されてしまっています。複雑な装置を見せられても、また難かしい理屈を並べられてもいったい何人の門外漢が興味を持つのでしょうか。人間あつての科学技術といいながら科学する人間たちはこれまであまりに顔を消されてしまっていたような気がします。科学技術の未来を信じて走り出す若者の顔は、目標を定めて走り出す“Breaking Away”の若者の顔に似てきつといい顔をしているでしょう。そんな姿は、専門領域の枠を越えまた科学技術への不信をも吹き飛ばして広く共感を呼ぶのではないのでしょうか。

もしそんな映画を作るとしたらやはりその舞台の選択も肝心です。楽天的な映画に合うのは未来を暗示する思い切り青い空と緑に囲まれた広々とした台地に広がる白いキャンパスです。そのためには大学は都心にあつてはまずいのですが、ストーリーに色をつけるためには都会にも近い方が良いでしょう。だんだん筆者の企みがおわかりになってきたかもしれませんが、何を隠そう大阪大学工学部はそれにピッタリではありませんか。広々とした緑多き千里の台地に広がるキャンパス、近くには夢多き万博公園、見上げれば国定公園箕面の山々、ブルーミントンに優るとも劣らないこの環境で世界にその名を知られる大阪大学。さあ舞台は揃いストーリーができればあとは人。ブルーミントンでこそ映画に出損いましたが今度こそエキストラ位には加えてもらいたいものです。

馬鹿な話になってしまいましたが、中年の入口にいる若者の青春へのノスタルジアとお聞き流し下さい。